



なかたに・よしお ●1958年大阪府生まれ。1981年大阪大学人間科学部卒業。1989年神戸大学で学術博士を取得。2004年より立命館大学情報理工学部教授。情報理工学部副学部長、総合科学技術研究機構長、情報理工学部長、学校法人立命館副総長・立命館大学副学長等を歴任し、2019年より現職。専門分野は、防災情報システム、人工知能、認知工学など。



荒波に挑むトップ

私の改革論

No.31

学校法人立命館総長
立命館大学長
仲谷善雄

立命館大学 ●1869年、西園寺公望が創設した私塾「立命館」がルーツ ▶建学の精神は「自由と清新」▶16学部22研究科、学生数約3万5000人
▶THE世界大学ランキング2019/1001+位、同アジア版2019/351-400位、同日本版2019/総合33位

取材・文/仲谷宏 撮影/楠本夏彦

世界の中で語られる学園、世界が語る学園をめざす

実現したい未来から、今解決すべき課題を考える風土を醸成

「知」の変化に応じて 大学での学びも変化

AIやICTなどの科学技術の急速な発展は今、「知」のあり方を大きく変えようとしています。その一つは、「他者との共生」に知の重点が移ってきていることです。そのため大学教育において

は、知識を伝達するだけでなく、対話を通して世界観や人生観などを含めた「共に生きる知恵」を養うことの重要性が高まっています。

もう一つは、「先をつくり出す」ことです。社会が急速に変化し、先が読みにくい現代においては、新しい価値を創出し、変化を自ら

画を検討しています。その中で立命館大学については、次の3点を重視しています。

1つ目は、さらなるグローバル化の推進です。1988年の国際関係学部設置以降、2000年の立命館アジア太平洋大学（APU）開設、2014年の大連理工大学・立命館大学国際情報ソフトウエア学部設置、2018年のアメリカン大学・立命館大学国際連携学科学設置をはじめ、これまでも教育研究のグローバル化を積極的に推進してきました。本年4月には、世界トップレベルの研究大学、オーストラリア国立大学と連携し、日本で初めてデュアル・ディグリー・プログラムを学部全体に組み込んだ「グローバル教養学部」をスタートさせています。

なお、日本人学生の海外派遣数は全国第1位（1543人）となっています。しかし、こうした状況に満足することなく、世界水準の「突き抜けたグローバル化」を進め、より一層のダイバーシティ環境を構築していきます。

さらに学生には今後、世界の諸問題を自分事として捉え、自身の生活を変えること、つまり「日常生活のグローバル化」を求めていきたいと考えています。

この実現には、学部教育におけ

るSDGsの活用を考えています。SDGsについて理解を深めることで、世界の諸問題を自分の生活と関連付けやすくなります。学部の垣根を越えた学びや、すでに探究型学習の中でSDGsを学んでいる小中高の附属校との連携も可能になります。取り組みを進めるなかで、学園全体にグローバルなものの方、行動様式を浸透させられるはずと見えています。

2つ目の改革は、研究が見える、体感できるキャンパスづくりです。本学は科研費獲得金額では私学3位であり、世界的に高い評価を得ている研究も数多くあります。学生が、こうした優れた研究成果に触れる機会をさまざまな形で設けたい。例えば研究開発中のロボットがキャンパス内で働いているなど、「研究の見える化」を進めて、学生の知的創造力を刺激するキャンパスへと変えていきたいと考えています。

3つ目はICTを活用した教育改善です。多様な教育ニーズに応えられるよう、教育のICTツールであるEdTech（EdTech）の活用を考えています。例えば理工系の学部では多くの場合、専門課程に入る前に最低限学修すべき内容があります。学生の理解度を高めるうえで、EdTechによる

私の改革論

No.31

学校法人立命館総長
立命館大学長

仲谷善雄

立命館大学 ●1869年、西園寺公望が創設した私塾「立命館」がルーツ ▶建学の精神は「自由と清新」▶16学部22研究科、学生数約3万5000人
▶THE世界大学ランキング2019/1001+位、同アジア版2019/351-400位、同日本版2019/総合33位

取材・文/仲谷宏 撮影/楠本夏彦

失敗も含めた感動体験をリアルにもバーチャルにも積み重ねられる、そんなワクワク感が空気のよりに満ちあふれる環境へと変わっていく必要があります。

さらなる改革で 学生の日常を変える

立命館では、2020年の学園のあり方をまとめた「学園ビジョンR2020」を2010年に策定し、大阪いばらきキャンパスの開設をはじめとする、さまざまな教育・研究改革を進めてきました。従来の取り組みをより一層強化すべく、教育・研究のグローバル化をさらに推進し、日本語能力を問わず、英語のみで授業を受け卒業できるコースの増設や、世界トップレベルの大学・研究機関との連携、国際共同研究の推進などに取り組んでいます。

これらの改革と並行して、2018年8月には、2030年に向けた「学園ビジョンR2030」挑戦をもつと自由R2030を発表しました。あらゆる人の自由な挑戦が希望に満ちた未来につながる社会をめざして、「世界の中で語られる学園、世界が語る学園」づくりを推進していく考えです。現在は、その具体的な計

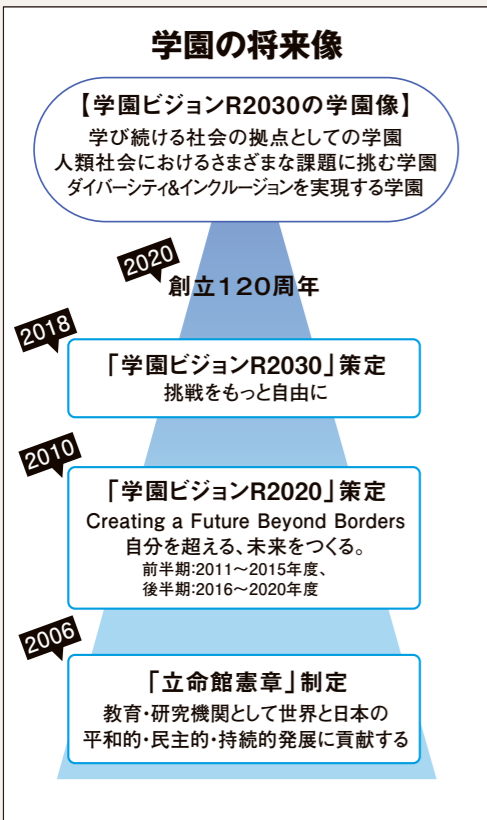
実現したい未来から 解決課題を洗い出す

日本は、多くの社会課題を抱える課題先進国だと言われています。私は、立命館大学・立命館学園を、それらの課題に率先して取り組む、課題解決先進大学・学園にしたいと考えています。そのためには、自由な発想を持ち、ためらうことなく課題に挑戦することが求められるでしょう。

未解決の課題に取り組む際は、「無意識のうちに自由な発想を妨げている制約を、いかにして取り除くか」が鍵になります。例えば、社会人のリカレント教育について考えたとき、社会人学生

の割合を収容定員の1割程度とすると、今ある教育体系に社会人をどう当てはめるかという発想からは脱しきれません。より多くの、例えば4割を社会人学生が占める状況を想像するとどうなるでしょうか。すでに学位を取得していれば、学位取得を前提とした体系的なカリキュラムへのニーズは低いでしょう。それよりも時間と場所に縛られず、必要なことが学べる環境を重視するはずです。このように考えると、仮定ではあれども検討すべき課題が見えてくるのではないのでしょうか。

今あるものの延長から未来を想像するのではなく、実現したい未来から解決すべき課題を考える。そうした自由な挑戦に学園全体で取り組んでいきます。



*「平成29年度協定等に基づく日本人学生留学状況調査結果」(日本学生支援機構)